

「くらわんか碗」「コンプラ瓶」など
庶民の日常食器を世に広め、400年もの間、
日本の焼き物の歴史を支えてきた波佐見焼。
今回は、波佐見焼原型師のご両親の元で
器のプロデュースを手掛ける
山口美穂さんをご紹介します！

今は、待っていても 仕方がない時代

正直、昔はかわいいと思えなくて(笑)

波佐見焼原型師の元に生まれ、石膏や陶器に囲まれて育った山口さんは特に焼き物に興味はなく、グラフィックデザインの世界に進み、福岡で活躍されていました。転機が訪れたのはドイツ・ベルリンの旅行中。建築物や美術品にふれるうち、デザインの意義やものづくりの原点を見つめ直し、実家の波佐見焼で何かおもしろいことができなかな、と考えるようになったのだそう。折しも時代は大量生産、大量消費の真ただ中、そんな時にお父さまからオリジナルブランドを作りたいという提案があり、早速工房の一部を展示ギャラリー

ペースに改装。2009年、“碗”と“オンリー・ワン”の意味を持つ「波佐見焼わんこうぼう」が誕生しました。

「正直、昔は焼き物がかわいいとは思えなくて(笑)。でも今は、思い描いたデザインが自由に波佐見焼で表現できて、お客さまの顔が間近で見られるからすごく楽しいです！」山口さんの作品は、葉っぱや月など自然をモチーフにしたものが多く、去年は香港で開催された日本人アーティストによるイベントLOVE LANTAUにも出展されています。



◆わんこうぼうならできるよって伝えたい

波佐見焼わんこうぼうでは、お客さまのリクエストに柔軟に対応できる型屋の強みを最大限に生かし、これまでにもさまざまなジャンルとのコラボレーションを実現しています。「コラボ作品は、カフェdai-tuさんとつくった自然ネックレスや、セレクトショップのelegaさんとつくったハートの箸置きなどがあります。cottodesignの琴尾さんとは猫のフォルムをした湯呑みをつくりました。持ちやすいフォルムや耳の下がり具合など細部にまでこだわったので、両親も平面のデザインラフを立体で再現するのに燃えていましたよ(笑)」猫湯呑みは岩田屋で展示販売され、予想以上の売れ行きに確かな手応えを感じたと話す山口さん。

「今は待っていても仕方がない時代。新しいことにどんどん挑戦して、わんこうぼうならできるよって多くの人に伝えたいですね！」

♥器は、日常のHappyに寄り添っているもの

山口さんがプロデュースを担当することで、これまで以上に一体感が生まれた山口家では、作品の企画会議が何より盛り上がるのだそう。「ごはんを食べたり、お茶を飲んだり、器は日常のHappyに寄り添っているものだから、わんこうぼうの器で少しでもやさしい気持ちになってもらえたらうれしいです」これからはアジアへの展開を視野に入れ、オンラインショップにも力を入れる予定です。やさしい器にふれたくなったら、わんこうぼうのをぞいてみませんか？



Profile
波佐見焼わんこうぼう/プロデューサー 山口 美穂
1984年生まれ。長崎県波佐見町出身。デザインの専門学校を卒業後、2004年デザイン事務所に就職し、2009年波佐見焼わんこうぼうを立ち上げる。モットーは「見えること(デザイン)と聞こえること(音楽)で、平和な世界をつくること」。自然をモチーフにした作品を次々と発表し、さまざまなジャンルとのコラボレーションも実現。